
見えない女王さま

一色強兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見えない女王さま

【ZPDF】

Z8085C

【作者名】

一色強兵

【あらすじ】

ネットに突然自分が女王さまになつて「真が掲載された……」。そんな謎に挑む女性のお話です。

「どうもありがとうございます。またの「」利用を心よりお待ち申しております」

いつもいつも、バカ丁寧な挨拶、ご苦労さまとしか言いようがない。まったく振り込めサギなんて、普通に考えたら絶対に成功しそうにない犯罪が大蔓延するのだから世の中というのは分からぬのだ。そしてそれが原因でいろいろと便利だったものが不便になつた。

ちょっと大きな金を口座振り込みしようとするとATMではなく窓口の行列に並ばなければならぬというのもその一つである。

月末近くになるとあちこちに買掛金を支払わないといけない。それも今まではすぐ近くのATMコーナーで済ませていたのだがそれがダメになつた。おかげで月末の一日結構長い時間を銀行で過ごさないといけなくなつた。大きなところなら銀行も営業を派遣してくれるのだろうが、うちのような零細ではこれより方法がない。だいたい金額がATM限度額をちょっと超えたぐらいのところばかりというでは頼むのも気が引ける。

バブルの後始末の結果なんだろうが、合併が続きかなり人が整理され昔に比べると窓口の向こう側にいる人間がかなり減つたように見える。しかも女だらけ。日本の金はすべて女に管理される時代なのだ。

それにしても僅かな振り込めサギグループの存在で、日本全国どれだけの人間が無駄に銀行で時間をつぶさなくてはならなくなつたのだろう。よくみんな文句を言わないものだ。

というのが毎月のお決まりとなつた私の感想である。それぐらい月末の窓口はひどくごつた返しているのだ。

それは別にこちらが意識していたわけではなかつた。ただ偶然が続いたのである。気がつけば相手となる窓口担当者がいつも同じ人

物ということになっていた。抜群の美人というわけではないが、笑顔がきれいなことは確かだ。二十代後半、あるいは三十代に入ったぐらいかもしない。独身かどうかは分からぬ。手を見ても指輪は一つもしていないし。

待たされる間見るものもないから結構細かいところまで観察してしまう。名札には宮下ほのかといふ名前があった。ほのかか、何から取つた名前なんだろう。そんな疑問が湧いてその名前は結構はつきりと記憶に残ることになった。

とある週末、会社の連中と一緒に飲みに出ることになった。といつても会社のすぐ近くの庶民的な店だ。一番奥の席に四人で固まつて座つた。

と、隣の席に座つていた女が座るひとした私に会釈をしてきた。
えつ、誰だつけ……

とりあえず笑顔で会釈を返しながら頭の中のデータに検索をかける。

ああ、そうか、宮下ほのかか、と結果が出た時には、彼女はとつぐに職場の同僚らしい一緒に来ている女の方に顔を向けた後だつた。その翌週の月曜は奇しくも銀行へ行く日だつた。先週末の出会いはいつもの型にはまつたやりとり以外の会話を宮下とできる可能性を作つた。そしてそれはその通りになつた。但し主導権は彼女に押さえられていたのだが。

「はい、こちらが伝票になります。ご確認下さい。……ところで相内様、この間は失礼いたしました、まさかあんなところでお会いすることになるなんて思わなかつたものですから」

と用務が終わりかけたところでこう切り出されたのである。

「よく私の名前が相内と……あ、そうか……」

私が出している通帳も払い込み伝票も会社名だ、と思つたら、よく考えたら私は社内でやつてゐるようすから顔写真入りの身分証明書をぶらさげたまま、いつもここに来ていた。会社への出入りが楽だし忘れるとはかと厄介だから。

「ええ、それで毎回はつきりとお顔とお名前を見せて頂いておりましたので……、ところで相内様、あのちょっとよろしいでしょうか」
伝票を受け取り終わり、いつもならすぐに椅子から立ち上がるところなのだが、こう話しかけられては動くに動けない。

「私に？ はあ、どんなことでしょう？」

「実は折り入つてプライベートにお話したいことがありますわ。あの今晚でもお仕事が終わってからということで結構なんですが、お時間を空けて頂くわけにはまいりませんでしようか？」

「は、はあ、それは……、ただ結構遅くなりますけど」

「八時ぐらいではいかがです？」

「ええそれぐらいなら大丈夫です」

「それじゃ先週末のお店でお待ちしておりますわ」

「ということで私は突然彼女に呼び出されることになった。それにしても全く心当たりと言えるものがない。富下は私にいつ何の用があるというのだろう。」

私の定時は六時半だが、たいていは七時ぐらいまではオフィスにいる。別にサービス残業というつもりではない。ただ夕方になると急にみんなリラックスして雑談なんかを始めたりするものだから、ずるずると遅くなることが多いのだ。故にこの分については私は残業申請をしていない。ということで富下の示した八時というプランは私からするといつも通りにしていればいいという意味で受けやすい時間だった。いつも通りに机を片付けいつも通りに着替えていつも通りに外に出る。あの店までの歩きの時間を入れれば何も考えなくてもほぼ約束の時間通りに店に行けるはずだ。

私が店に入るともう富下はこの間と全く同じ席に座っていた。但し今日は連れがない。一人のようだ。そして入り口の私を見つけると大きく手を上げた。実のところ、そうしてもらわなかつたら私にはその女が富下だと確信がもてなかつた。私も人のことは言えなが、〇〇のアフターファイブの服は制服姿からはなかなか想像にくいものなのである。富下は銀行の窓口に座つてゐるような感じの

女には見えなかつた。イメージとしてはもつとワイルドな、黒革のジャンパーにブラックレザーパンツという黒ずくめの姿だつたのである。そしてそれは先週末の姿が普通の落ち着いたビジネススーツだつたことからしてもかなり意外のものだつた。

「ちょっと驚かれました？ この格好」

「え、ええ、まあ」

私がその席に座ると真つ先にそのことを言つてきた。

「人は見かけによらない……、まさにその通りですわね、お互い」
「はあ？ お互い……ですか？」

私には何故宮下がそんなことを言つのか全然分からぬ。私の格好なんて電車にでも乗ればまあ、確実に同じ車両に同じパターンの女が見つけられるぐらいありきたりだ。白いブラウスに紺のスカート、ベージュのパンスト、黒いヒール、何も意外性などないはずなのだ……。

宮下は私の質問口調のリアクションをまるでそれが演技であると断定しているかのように薄笑いを浮かべて全然取り合はない。

「うふふふ、意外ですわよ、相内さんだつて。今の相内さんの格好も、昼間私の前で座つてらした制服姿の相内さんも」

「どういう意味です？」

私は素直にこう聞いた。だが……

「とあるサイトで相内さんのお写真をいつも拝見させて頂いてあります」

「サイトって、インターネットのサイトの意味です？」

「ええもちろん。実はそれを拝見してあなたに憧れていたんです。ですから初めてお客様として私の前にお座りになられた時は本当に驚きましたわ。絶対お目にかかることなんかないだろうと思つていたら突然目の前に実物が現れたんですもの。ただいくらなんでもお客様にこういうお話をすることもできなくてお名前を覚えるといふこと以外何もできなかつたんです」

「ちょ、ちょっと待つてください。私、自分の写真をインターネット

トのサイトに「アップなど一度もしたことはありませんけど……」

「失礼します。『注文の方はお決まりでしょ』つか？」

ボーイが注文を取りに割り込んできた。適当につまみビールなど頼み、再び話題を戻す。

「それでさつきのお話ですけど、私の写真がサイトにあるって……」「ええ。あるサイトの投稿掲示板なんんですけど。当然『存じでしょ』う。『え、まあ私のことでしたらどうか』安心下さー。私もいわゆる同好の士つてやつで……」

「え？」

私もインターネットぐらいは使うが、パソコンを立ち上げてもメールとショッピング以外にはあまり利用していない。だから、掲示板とか投稿とか言われても言葉ぐらいしか知らない。そんなだから自分の写真がネット上にあると言われても何のことかさっぱりだ。

さらに安心しろときた。もうお手上げである。

「でもさすがにあそこまで大胆な方には全然見えませんもんね。以外の人だったらまず相内さんだとは絶対思いませんよ」

「はあ、と言われましても……」

「よろしいじやありませんか、そんなにおとぼけになられなくても。ここは同好の女同士ということで、気楽にお話、しましょうよ」

「あ、あのちよつと……。私、富下さんが何を話されてるのかさっぱり分からんんですけど……、申し訳ありません」

やつとの思いで頭を下げながらいう言つとよつやく富下の口が止まつた。そして先ほどまでのくだけた表情からまじめな顔に戻つた。「ま、まさか、私、人違いを……、いえ、そんなはずは……絶対見間違えるなんて……何度も見て確認したし……」

そして私の顔をまじまじと見つめる。

「何度見てもやはり相内さんだと思うんですけど……。そんなそつくりさんがいるなんてとても思えませんし。失礼ですけど、その左目の中尻近くの小さなほくろまで私は確認させてもらつたんですよ。そうだわ、お目に掛けましょう。そっちの方が話が早いでし

よつ。もし本当に相内さんの全く身に覚えのないことならそれこそ大問題でしょうし。急ですけどちょっとおつき合い下さい」

「いつたいどこへ？」

「この表通りにあるまんが喫茶です。あそこにはネットに繋がるパソコンがありますから……」

「ということで私たちはすぐに注文をすべてキャンセルして、詫び代少々を置いて店を出た。富下の話ではそもそも私が全く分かつていないとしたら大問題だというので付き合わないわけにはいかない。ちよつと前まで普通の喫茶店だったのが店を閉じ改装工事が終わつたと思つたら突然出現したのがそのまんが喫茶である。実は私は入つたことはない。従つて中がどんなふうになつているのかを見るのも初めてだつた。入り口を入れると図書館のように書架が並び夥しい数のまんがの単行本がある。そしてその奥に会社の打ち合わせブースのように仕切り壁だけで作つた個室スペースがずらつと並んでいた。

「いらっしゃいませ」

「デュエット（二人用）のPCスペースを」

「かしこまりました。四十八番をどうぞ」

富下はかなり慣れているらしい。店員から渡された伝票を挟んだレシートホルダーを受け取るとさつさと奥へ入つていく。

西部劇の酒場にありそうな田隠しだけのドアの横にある番号プレートを頼りに奥に進んでいくと、それまでのスペースよりかなり大きいスペースの並びが現れた。そしてその三番田が指定された四十八番だった。

「さ、奥へどうぞ」

富下に薦められ私が先に中に入る。大きな机の上にパソコンが一台。そしてこつち側には一人掛けのソファード。確かに一人用だが、どうやら恋人同士がいちゃいちゃするための空間にしか見えない。女一人で入るような場所ではなさそうだ。

私がそんな観察をしている間も富下はてきぱきとPCを立ち上げブラウザを立ち上げ、検索サイトにつなげ、いくつかの単語を入力してはネットサーフィンを始めた。そしていくつかのサイトを経由し、五分ほどでお目当てのサイトに行き着いたようだ。

「これです……」

私は指された画面を見て身を凍らすことになった。

そこには一枚の写真があった。「私」が椅子に座っているところを真横から撮つたものだ。少なくとも顔を見る限り「私」に見える。だがそれは私ではない。写されている部屋はどこかのオフィスのようなどころだがそんなところに見覚えはないし、着ている服だって見知らぬものだ。そして何よりも私の常識からすればありえないことを写真の中の女はやつていた。尻の下、椅子の座面の上に座布団のようすに男の顔を敷いているのである。男は仰向けになつた状態で顔は完全に尻の下で見えない。しかも全裸だ。もちろん局部はモザイクで隠されているのだが……。女は全くそこに男がいるなどとは思っていないような澄まし顔である。そう、顔は間違いなく私の顔だ、髪型も……。

「ど、どういうこと？ 私、こんな写真知らない、場所も知らない、こんな服だつて持つてないのに」

「違うんですか？ でもお顔はそつくりですよ。こんなそつくりな人が世の中にはいるなんて、まさか。まだありますから他のも見てください」

富下が操作すると次々と新しい写真が現れた。どれもこれも全裸の男を責め飜つている女としての「私」だつた。鞭を持ち振つているもの、足で蹴飛ばしているもの、たばこの火を胸に押しつけているもの……。私はずっとそれらの写真を見ていてようやく冷静さを取り戻した。相手の男は顔が出ないように注意を払つてている全くそれが誰かを特定できない。普段からその全裸を見慣れていれば誰かと分かるのかも知れないが、私にはそもそもふだんから裸を見慣れている関係にある男などいない。それに必ずしもいつも同じ

男でもないようだ。そしてそれに気がついてからよく見ると「私」についてもおかしな点があることに気がついた。私は「」くありきたりの淡い色のマニコキュアしか使わない。ところがこの「写真の「私」はかなり派手な赤だつたり、淡いものだつたりと一定しない。さらによく見れば爪の形も微妙に違う……。同じ人間じやない。つまり顔の部分だけ私に差し替えられたもののような気がしたのである。

「富下さん、これ、もしかして顔のところだけ私にされてるんじやありません? CGが何かの技術でそういうこともできるんじや……」

「え、そんな、まさか……。ちょっと待ってください」

富下はその写真を一度ダウンロードすると別なソフトから開き直した。そして「」ちや「」ちやと沢山並んだアイコンをめまぐるしく操作して顔の部分のドットを拡大したものを丹念に見ていった。

「コラージュされてる……。間違いありませんね。これ合成されたものです」

「合成?」

「ええ、今相内さんが言われた通りです。これをいつも投稿している『ピヨン吉』っていうハンドルネームのヤツがきっとやつてるんでしょ?」
「」じつ、よく大胆に自分の女王さまの顔出し写真をネットに出すな、と私も思つてたんですけど、何しろ美人だし、『本人もきっと納得されているんだろうと……。けどまさかコラージュだつたとは思いませんでした。ヌードとかのコラージュだつたら肌のつなぎ目の不自然さで、きっとすぐに分かつたんでしょうけど、着衣の女王様じゃなかなか分かりにくいですもの。でもヌードにされるよりはマシですね……。ところでこのピヨン吉なんですが、こいつは相内さんのすぐ身近にいるんじやありませんか? ゼロから顔をCGで似せて作るのはかなり難しいでしおうから、必ず相内さんの顔をかなり隠し撮りして取り溜めしてるんですよ。そしてそれを加工して自分の女王様の顔と差し替える。全く何でこんな手のこんだことを。この相手の女性にしたつて、いい気持ちはしてないはず

なのに……。そっか、元の写真も何かのパクリなのか……。そうなると写真の中の男はぴょん吉じゃないってことに……、あ、その、申し遅れましたけど、要するに私はその、こういう男苛め系が好きだったもので、それでこの写真を見て相内さんとお近づきになれたらしいなと思つて……、どうもすみません。とんだ失礼なお誘いをかけてしまつて……。どうかお許し下さい」

富下は深々と頭を下げた。

「い、いえ、そんな謝つて頂くようなことじゃありません。別にお気になさらずとも。それに自分の顔がとんでもないことに利用されてることが分かったですから、感謝しないといけませんわ。それにしても男苛めの写真を掲載するサイトなんてあるんですね。私も初めてなんですが、結構好きかも……なんて言つてる場合じゃないか。ははは」

「そう言つて頂けると私もほっとします。ですかゞこの写真は放置できませんよ。事情からすればとんでもない話です」

「そうですよねえ、だけど私にはどうしていいか……。私、どうしたらいいんでしょう?」

「間違いなく肖像権侵害ですね……、まずは何にしてもぴょん吉が誰かを突き止めないことは話にならないのと、今掲載される写真をとにかく削除されることです。もつとも一度ネットに流出したものをお完全に抹消つてのは不可能ですが……。失礼でお時間を取らせてしまつたお詫びに私の方でやれることはやつてみます。ただこのサイトオーナーが協力してくれてぴょん吉のHPをつかめたとしても、プロバイダーは、当局にしか接続記録は見せないだろうし、かと言つてコレージュ写真の肖像権侵害だけで当局がどこまで動いてくれるのかも甚だ疑問だし。相内さん、ストーカーっぽい男とかで思い当たるような男はいませんか?」

「さつきからいろいろ心当たりはないか考へてるんですけど、今のところわざわざぱり……」

「やうですか……」

こうして全くひょんなことから私は自分の肖像権侵害をしているマゾストーカー男を捜さねばならないことになってしまった。それでも何でよりもよって私が女王様なんだ?

「いや、それはやはり相内さんのお顔がきりつと引き締まった感じできつとマゾ男の心をくすぐるんだと思しますよ。かわいい系じゃ、やっぱ様にならないんですって」

というのが褒められているのかどうかよく分からぬ富下の解説である。私は曲がりなりにもかわいい系を目指しているつもりだったのだが……。

その翌日から私は自分のまわりの空気が一変したような気がした。見えないストーカーが私に常にレンズを向けている。そういう意識が芽ばえたからだ。しかしいくら考へてもそんな人物は思い浮かばない。私の勤め先のオフィスは、おばあちゃんと言つてももう失礼にならないくらいの女性が一人とこれまたおじいちゃんと言つても全然問題のない社長しか昼間はいないのである。もちろんそれ以外の社員もいるが、少なくとも私のいる部屋にはいない。そして滅多にそういう社員の出入りはない。だから隠し撮りどころか、隠し力メラをセットするのだつて難しい場所なのだ。

会社以外でもつきあいはそう広くないし、アパートも一人暮らしだ。たぶん孤独に強いというかもともと寂しがりやではないことが災いし、彼氏にも恵まれていないのだが、そのことに不満も無い。社長が時折縁談を世話をすると黙つてくる時もあるが全部断つた。そういう気分じゃなかつたから……。

なのでストーカーの心当たりは全く無いのである。

富下から教わつたそのサイト、「ミストレスラウンジ」をチェックするのはあの日以来、私の日課となつた。新しい写真がアップされているかを確認するのと、今掲載中のものが削除してもらえたかの確認の両方をするためなのだが、新しく掲載されるものも無かつたが、今掲載中のものもずっと残つたままである。富下の言つた通り顔の、それも一部だけの肖像権侵害では相手にしてもらえないの

だろうか……。ただよくよく考えてみれば、私の受けた損害というか、精神的苦痛など多寡が知れてる。この「写真のおかげで縁談がパ一になつたというような話でもあれば違うのだろうが、実際には生活に何の変化もない。だいたいあのサイトのアクセス件数はそれほど多いものでもないらしい。非常に特殊な趣味の世界だし、男を惹きつけるような女の裸の写真が少ないこともあるかも知れない。どっちにしても例の写真を見る人間は少ないのだ。

それにしても世の中知らないことが多いものだ、とつくづくそのサイトを見て思った。女性に尽くされたいと思うのが男だと思っていたのだが、苛めてもらいたいという男がまさかこんなにいるとは……。サイトの中にある募集掲示板をちらりと見てみると、女王様の男奴隸募集などより、女王様を募集する奴隸男の書き込みが圧倒的だ。男って生き物はつくづく謎の深い生き物だと実感することになつた。

しかし宮下はただこのサイトを見ているだけで満足しているのだろうか？ それとも実際に男を飼つている女王様なのだろうか？ あの雰囲気からするともしかしたらという気がする。それに私を呼び出したのも女王さま仲間と勘違いしたと考えれば納得も行く。もしかしたら、いわゆる複数プレイの相手を探していたのかも知れない。人に言いにくい趣味だけに、同好の士というのはきっと貴重な存在なのだろう。

三日ほど経過し宮下から連絡があつた。状況の確認と今後の対応を相談したいのでまた例のまんが喫茶で会つて欲しいという。私はもちろん快諾し同じように二人用PCスペースで彼女と会つた。

「じゃあやはり心当たりは無いんですか？」

「ええ全然……。だいたい男の人の知り合いつてほとんどいないんですね」

「そうですか。実は案の定サイトオーナーにメールを出してもまともな反応じゃなくて……。コーラージュがどうしたこうしたじゃ、説得力がないというか、問題だと思われてない感じで……。実際芸能

人の「ワーディ」なんかいぐらでもネット上に転がりますか?」「ううなんですか……。じゃあ、どうしようもありませんね。でも

「それほどこれを苦痛にも思つていませんから」「でも悔しくあつません? 勝手に隠し撮りされて勝手に合成され

てネットに流されるなんて」

「そう言わればそうですけど……」

「あのう、相内さん……、つかぬことを伺いますが……」

「富下は急に下を向き、小声になつた。

「はあ……、どんなことでしよう?」

「あのう、正直におっしゃつていただけると助かるんですが、その、いわゆる女王様っていうか、男を苛めて喜ぶ女に嫌悪感とか感じません? あるいは女に苛められて喜ぶ男に對してでもいいですけど

「……」

正直どう答えるか迷つた。確かにこの間初めて自分の「ワーディ」写真を見た時は相当な嫌悪感を感じた。しかしこの数日、毎日あのサイトを見るようになつたら全然そういう感じは無くなつてしまつた。ただ、そのことを素直に言つたが、何となく、自分も同じ性癖の人間にされるような気がして素直に口に出せないのだ。

「やつぱり……」

「い、いえ、そうじゃないんです……、」

「そうじゃない?」

私は富下が既に自分の性癖を正直に告白している以上、そんな些細なことにこだわるのはおかしいと直した。

「最初は確かにびっくりしましたけど、もう平氣です。このところ毎日このサイトを見てましたし、何とも思わなくなつました。ですがそれが何か?」

「実はぴょん吉をあぶり出せやつないアイデアがあつたもので」「あぶり出す?」

「ええ、ううです。ただそのためには相内さんにかなりお願ひしな

いといけないことがありました……」

「という言葉で始まつた、富下のアイデアとは、次のようなものだつた。

私が実際に男を責め罵るシーンを「カラージュでない本物の写真にし、それをこの掲示板にアップするといつのだ。

「どうなると思います？ ぴょん吉はたぶんあなたの身近について毎日あなたを盗撮していた人間です。しかもこのサイトの常連でこんなカラージュ写真ばかり投稿している……、ということはまぎれもないかなりのマゾ男でしかもあなたを女王さまのあこがれのように見ていることは間違いないわけです。そんな男に、もしあなたが他の男を責め罵つている合成でないリアルな写真を見せつけたら、彼に与えるショックつていうのは相当なものだと思いません？ 一種の責めですわよ、これつて。もつ一度と相内さんのカラージュ写真が出てくることはないです」

絶句もののアイデアである。だがいやだという思いはあまり無かつた。それよりも面白いという思いの方が強かつた。それにカラージュだ、リアルだと言つたところで、私がそういうことをしている写真は既にネットにあるのだ。今更そのバリエーションが増えたところで何か変な影響が出るとも思えなかつた。しかも掲載するサイトは星の数ほどあるサイトの中でも折り紙つきのマイナーサイトなのである……。

「……だけど、そんな写真撮れませんよ、私にはそんなことに協力しててくれる男性の友人なんかおりませんし……」

という言葉を暫く考えてから私が洩らすと富下は身を乗り出し、私にこうたたみ掛けてきた。

「もし相内さんにその気がおありでしたら、それぐらいのことは私が何とでもしますけど……」

結局私はこの富下の提案に乗つた。彼女はやはり本当にやうこうプレイを楽しんでいたのだ。そして渡りに船、のよつなもので私を折角だから同好の士にしてしまいたいという想いもあつたらしい。

で、自分が飼つていてるブタ男一匹と女王さま衣装を撮影のため貸してくれるという相談がすぐにまとまりた。因みに撮影も彼女がやってくれるという。場所についてもいろいろと詳しいらしく、そういうムードばつちりのあるSMショーパブを開店前に借りることになった。

約束の日、三人で待ち合わせしてその店に行く。廊下はいかにも辣腕銀行ウーマンという感じで完璧に段取りをしていた。店側は完全に廊下のリクエスト通りに店内を「コレーション」してくれていたのである。目にも眩しい暴力的な赤一色になつた壁と床をバックにして、黒革づくしのブラ、コルセット、エバツクパンティ、ハイヒールブーツに身を包んだ私と首輪、全頭黒革マスクというブタ男くんが登場する。何故ホテルではなくこついう店にしたかというと、照明設備がばつちり整つているし、小道具はいろいろ揃つているし、余計なものが「写りこむ心配は全く無いからだ」。

「じゃ、今度はこつちの太い鞭を持って、その檻の前に立つて……引き綱を持って……、お前はこつちよ……、じゃ、撮ります……」
「相内さん、顔が優しすぎ。もつと口を真一文字にして、カメラを睨み付けるようにして……、頬に力は入れない……、そもそも少しあご上げて……、目線だけ気持ち下げて……、少しだけ、目を細めて、はい、オーケー」

という具合におよそ一時間に渡るそのSMイメージ写真撮影会は終わった。写真撮影が目的だから私はポーズをつける以上のことは何もしていない。あくまでも男を苛めているような素振りをしているだけである。まるで学生時代にやつた演劇みたいなものだ。

撮影終了で店のスタッフの人と機材を片付けるとお店の開店時間である。こういう流れではお疲れ様とさつさと帰るというわけにもいかない。店の人も何しろ女王さま姿の私を見ていたわけで、もう絶対その趣味の人と断定してかかっている。なので、三人でそのSMショーを見ていくことになった。

「じついうところは初めてですか？」

「ええ。私あんまりお酒を飲めないもので、飲みに出ないんです。それに田舎者なんで盛り場に出るのって、なんか気がひけて……」

「まあ、それじゃあいろいろストレスが溜まりませんか？ 私なんか、この趣味に出会えたから、何とか銀行の窓口なんかやってられますけど、そうでなかつたらきっと毎日どこかでヒステリーを起こしてましたわ」

窓口業務がそんな大変なものだとは思つていなかつたが、確かに毎日どんなお客様が自分の目の前に来るか分からぬのだ。相当神経をすり減らしそうな気はする……。

「私の仕事はほとんどパソコンに数字を打ち込めばいいだけみたいな仕事ですから。宮下さんみたいに気をつかう仕事じゃないです」「そうなんですか……でもそれじゃああんまりお仕事面白くないんじゃないかもしれません？」

結構キモつぽい言葉だ。実のところ私は毎日飽き飽きしていた。来る日も来る日も同じ事の繰り返し。

「……少し……」

と返事をしけたところでファンファーレが鳴った。どうやらお店のショーアーが始まるらしい。店の中を見回すといつの間にか結構人が入つていた。男女半々ぐらいだろうか。一見すれば普通のカツップルに見える一人が多いが、もしかしたらその中のかなりは女王さまと奴隸ということなのかも知れない。また私たちのように女が多いグループも結構目に付く。逆に男だけということは少ないようだ。ゲイは女王さまには興味がないということかな。ま、当たり前か。

ショーアーそのものは一種の無言劇である。セリフは無いが、筋書きとしては、下人と召使いが恋に落ち女主人に結婚の許可を求めるが女主人はそれを認めない。一人は駆け落ちしようとするがつかまり引き戻され、女主人から折檻を受けるという内容である。現実にはショーアーの時間のほとんどはこの折檻のシーンになつてていることは言うまでもない。そして女を責めている時間の倍ぐらいの時間が男責めの時間に充てられていた。要するにそういう店だということだ。

責めのほとんどは鞭打ちである。思つたよりは口くはない。

シリーだからあまり過激なことは出来ないといつのはあるのだが。後は家具代わりにそれたり、吊されたり、体中に洗濯ばさみをつけられたりしていた。

「いかがでした？」

「ええ、そこそこ面白かったですよ」

「気持ち悪いとかは？」

「ああ、そういう嫌悪感は全然……」

「そうですか。それなら何よりです。お誘いした甲斐がありました。……それはそうと今日撮影した写真をネットに上げる時、どんな名前で出そうか考えてるんですけど、」

「名前ですか？」

「ええ、ハンドルネームですけど、こいつは世界ですから、やつぱり女王さまっぽい名前が何かないかなって……。何かご希望ありません？」

そんなこと考えたことも無かった。そつか、女王さまっぽい名前ねえ……。

「他の人はどんな名前を？」

「それはいろいろです。さすがに卑弥呼なんていう人はいないけど。ダイアナさんだつてエリザベスさんだつているし、」

「向こうのお名前ですか……」

「いえそればかりじゃないですよ、普通の女性の名前のまんまの人も多いです。ただ当てる感じをちょっと凝つたものにしてますけどね、わざと難しい字を当てる女王さまの威儀を保つていつこうでしようか」

そんな話をされたら私にはいよいよ分からぬ。で、結局こうなつた。

「お任せします」

翌日の夜、私はアパートに戻るとすぐにパソコンを立ち上げた。

携帯に宮下からのメールがあつた。例のサイトに写真を投稿したと

いうのである。出来映えも含め何から何まで任せつ放しなので当然と言えば当然だが、どんなものがどんなふうに上がっているのかはかなり気になっていた。

私は綾霧女王という名前にされていた。なるほど女王の格調の高さを確かに感じる名前だ。因みに投稿者の名前はポチ。そういえば撮影の時、時折富下は彼をポチと呼んでいた。なるほど。とにかく知らない人が見れば、この男が自分の女王さまの写真を投稿したように見えるという寸法である。因みにイメージ写真だからいかにもムード重視の絵で女王さまと奴隸のポートレートという感じでそれほどエロくもグロくもない。彼はちゃんとパンツも穿いているのだ。私は私自身思っていた以上にその格好が似合つていて正直驚いてしまった。いつぞや富下の語つた通りだと思った。私はかわいい系の顔ではなくて、女王さま系の顔らしい。笑顔の写真なんかより、この澄ましてる顔や、きつく睨んだ顔の方がずっと美人に見える。そう考えるとぴょん吉つていうのはちゃんと私の魅力を本人以上に正しく見抜いたことになり、その眼力に多少なりとも敬意を払わないといけなくなるような気がするから不思議だ。

こういう自覚ができるとそれがいろいろな面で影響を及ぼさないわけがない。自分の着る服、小物、アクセサリーがだんだんそれっぽい匂いのするものを選ぶようになってしまった。もちろんお化粧もうである。輪郭を濃くし、きつめの顔を作るようになつた。

例の写真はかなりの枚数がある。ポチはそれを週二回三枚ずつ投稿していた。

で、それが三週目を迎えた時、なんとぴょん吉が動いたのである。富下の作戦は自論見通りにはならなかつた。何と私を使つたコラージュの新作を発表してきた。しかもぬけぬけと富下が私につけた名前、綾霧女王という名前まで使つてきたのである。

こうなると知らない人が見たら私が複数の男奴隸を飼つているようしか見えない。しかもぴょん吉が今回上げて来たのは、従来のよう普通の着衣ではなかつた。

「」の間の撮影では、宮下がぴょん吉にショックを与えるため私は黒革のボンテージを着せたのだが、今回はまるで張り合つよう露出度の高い乳房がかなり出て、パンティもほとんどバタフライだけというような姿の「私」にされていたのだ。しかも相手の男の性器を手で握りつぶすような仕草までしている……。もちろんその部分は荒いモザイクが入っているのだが一応それと分かる。

「まいったわね、まさかぴょん吉がこんな反攻をかけてくるなんて」というのが宮下の言葉だ。ちなみにあれ以来、私と宮下は本当の友達になってしまった。だから言葉もお互いフランクなものに変わった。

「いつたい何のつもりであんな「コレージュ」を上げてきたのかしら。しかもコレージュだつていよいよはつきりわかるよつたモノで」裸の部分が増えたので、合成が以前のものよりずっと目立つのである。

「そうねえ、何て言うか、」の写真が作り物だつて見透かされた感じがするのよ」

「見透かされた？」

「うん、相内が実は本物の女王さまじやないことぐら」ことくに見える通しだつて暗に言つてる、つて言つたらいいかな。やっぱ、作り物の女王さまか本物かはマニアにはすぐ分かるのかなあ。」のちはコレージュだけお前のだつてフェイクじゃないかつて言つてるのよ

私は少々、いやかなりこの言葉に力チンときた。本物が出ているのは分かつたが、お前はとんでもない嘘つきじやないか、と名指しされて言われたような気がしたのだ。

「そんなのつてないわ、図々しいにもほどがあるわよ」

「何て言うかな、マニアのプライドみたいなもんがあんのよね、私何となく分かる。別にこういうものだからつてことじやなくて、自分が好きでいろいろやつてるところで全然何も知らない素人が形だけ真似て格好つけて闖入してくるのがそもそもうざいって感じ……」

まあそう言われば分からんでもない。実際に私は女王さまでもなんでもないし、奴隸男を飼つたこともないことは事実で、そう言われば形だけを作つたのは私の方ということになる。カラージュでもモザイクの代わりに私の顔を作つただけだから、写真としては確かに本物なのだ、ぴょん吉のものは。だけど、それにしたつて……、何か納得いかない。

「ねえ、本当に女王さまやつてみる氣ない？　このままじゃなんか気分的に悔しいわよね」

私の気持ちが言いようのない淀みに嵌つていた時に、富下が洩らしたこの言葉は、私にはこれが正解と響いた。

富下は私にとりあえずということでバイトのプロ女王さまをやつてみることを勧めた。別に身体を売るわけじゃないし、様々なタイプのマゾ男を見ることができるし、それに何より店側が女王さまのイロハをいろいろ教えてくれるからというのがその理由だ。もつともマゾ女のバイトほどは金にならないそうである。ま、そりゃそうだろうな。

とこうことで私は週に二回ほど富下の紹介してくれたクラブといふところに通うことになった。ほとんどは電話でこちらが出張に行くというシステムだが、一応拠点としているラブホテルみたいのがあって、私は当面はそこ専門とこうことになった。女王さま教育をちゃんと受けるためである。

衣装も揃つていてそういうものを着込むだけで気分が一新できるところでもここは私にとっては都合がよかつた。そして沢山の責め具をどのように使って男を責め斬るのかという技術の習得という点においてもここは確かに都合が良かつた。ここにはだいたい三人ほどの女王さまが常時待機しているとのこと。因みに富下も一時期ここにバイトをしていたことがあつたそうだ。

私は、私としては大いに意外なことにすぐに常連のお客さんがつくようになった。ただ出勤日が少ないから予約客だけで一杯になり、新規さんというのが思つたより少ないということになつたが。た

だその結果、本業である〇〇で得る収入とバイト収入のバランスがおかしなことになつた。収入面で言えば〇〇で得る収入など全然問題にならないのである。こうなると店からもやして富下からもこう勧められることになつた。

「一生今の会社に勤めるつもりがそもそも無いなら、いつそのことプロ女王さまになつた方がいいんじゃない？かなり好きなんですよ、女王さま。そうで無かつたらこれだけ人気が出ることは絶対ないもの……。もしかしたらあなたの常連客の中にあのびょん吉もいるのかもね。あなたがあそこに行くようになつてからはちつとも投稿もしなくなつたし」

女王さま業、確かに大好きだと認めないわけにはいかない。

最初はお客様にサービスするつもりで責めていたのだが、いつのまにか、自分が心の底から苦しむ男を見るのが好きだつたことを発見してしまつた。わくわくするのである。どきどきするのである。楽しくてしょうがないのだ。残り時間をお客以上に気にしてしまう自分がいた。そして自分が責めている男の中にぴょん吉が混じつているかも知れないと指摘した富下の言葉はそれに拍車をかけた。

「私、こつち一本にする……」

もう私にはネット上の写真のことなどどうでもよくなつていた。しかし、富下がパートナーのポチ、そう、実はこの店の経営者とこんな会話をしていたことは私には知る由も無かつた。

「まったく今回ほど回収に冷や汗をかいことはないわ。こんなにSMクラブが儲からないものだとは思わなかつたもの。でも飛び切りの上玉女王さまを据えることができて、どうにか店の経営も安定しそうね。頼むわよ、あんたのところが不良債権に区分されたら、私の責任問題になるんだから。それにしても銀行のロビーの監視カメラの映像を使ってコレージュ写真作つたり、下手な芝居を打つたり、変なサイトに投稿したり。私はね、これでもれつきとしたバンカーなんだから、こういうことはもうさせないで。今回は相手がどつともなくお人好しで助かつたけど……」

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8085c/>

見えない女王さま

2010年10月8日15時47分発行